

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	「よみ」の世界を開く : 二つの言葉の取り合わせによって広がる世界を詠む
Author(s)	葛西, 琢也
Citation	児童の言語生態研究 , 19 : 98 - 107
Issue Date	2018-10-27
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046626
Right	
Relation	



「よみ」の世界を開く

—二つの言葉の取り合わせによって広がる世界を詠む—

葛西琢也

1. はじめに

城跡と昼下がりということばで、なにかが触発された。それを合わせというんです。われわれのイメージというのは、合わせられている。日本文化というのは合わせの文化だとぼくは思っている。これを取り合わせという。取り合わせが狂っていると、イメージが崩れるんです。だけど取り合わせが、うまく合わされているときに、われわれのイメージは固定したものになる。安定して、なお強烈になる。

平成4年8月に宮城県女川町の女川第二小学校において、「よみ」の世界を開く授業が初めて行われました。その指導案検討の場での主宰上原輝男のことばです。それから一五年、この度は、取り合わせによって触発されるイメージーション、子どもにとっては、ハッとした場面を捉えることに的をしほって

行った授業の報告です。

(1) 日時 平成19年8月17日(金)

午前8時30分～9時30分

(2) 児童

伊豆の国市立大仁北小学校
第5学年 亀山貴洋子学級

男子12名 女子18名 計30名

(3) 領域 構え

2. 授業の構想

〈「よみ」の世界について〉

「よみ」の世界とは、無意識、潜在意識ということばを知る以前から、日本人が慣れ親しんできた世界です。世界中を見渡しても、毎日の新聞紙上に詩(和歌・俳句)が掲載されている国は日本くらいのものだそうです。辞世の歌や句を詠み続けているのも日本人ぐ

らいのものだと聞きます。この世からあの世への意識転換として歌を詠むのです。「よみ」の世界すなわち潜在意識世界に参入して、ことばを操れば、そこにもうひとつの世界が構築されます。ひとつのイメージ世界が広がります。これが「よみ」だと考えています。

創作活動として考えられていますが、潜在意識世界から離れて「よみ」は成立しませんから、作為を越えるところがなくてはなりません。歌を詠む、句を作ることの指導とは、ことばを教える、或いは五・七・五に当てはめることではなく、物おもうことの広がりや感覚の感度を上げることなしには考えられません。そのために、二つのことばの取り合わせを用います。子どもたちが、今もつとも夏を感じるものと、夏を感じるものの組み合わせが子どもたちを別時空に導くと考えます。このとき、人はハッとします。このハッとした場面を捉えること、これが詠むということでしょう。これを、私どもはトランスフォー

メーション（時空転換）と呼んでいます。この時空転換によって自ずから開かれる世界が「よみ」の世界です。

〈子どもたちとその生活圏〉

山々に囲まれた伊豆大仁の子どもたちの意識世界を考えると、富士山の存在を考えないわけにはいきません。日常の生活圏の向こうに富士があることを子どもたちは意識しているのでしょうか。子どもたちの意識世界を一枚の絵にしたとき、遠景にあるのは富士山でしょうか。近景の伊豆の山や川でその絵は構成されているのでしょうか。この「よみ」の授業では、潜在意識としての富士を垣間見ることもあるのではないかと考えています。北斎の富嶽三十六景を見ても分かるように、富士山の見えるところに住む人々の生活は、遠景の富士とともにあります。五年生のこの大仁の子どもたちの意識世界は、すでに富士とともに在ると考えられるのです。

「動かざること山の如し」といいますが、古代人の考えた山は、むしろ動くものでなかったでしょうか。古代人と同じ意識活動を現代の子どもたちにも見ることができるのではないかと、という期待もあります。山は四季に変わり、笑い、鳴動し、成長する。子どもたちの素直な感覚は、神意の発動する山さえも捉えているのではないかと考えられるのです。

子どもたちに潜在意識世界との行き来が少しでも続いているのなら、そのトランスフォーメーション、時空の転換の所産としての「よみ」を期待したいのです。というのは、これは、表現活動、表現指導から最も遠い視点に立った考え方と言えるからです。潜在意識世界に参入し、トランスフォーメーション、時空の転換を触発することができたなら、これは解放された精神活動の所産としての「よみ」となるからです。

このクラスの子どもの多くは、現代っ子の例にもれず、核家族であったり、新しくこの学区に移り住んできた子どもたちであったりです。新しい土地で生活し、新しい人間関係を造りあげていく力は、単に現実適応、現実対応能力だけではないはずで、その土地で生きていく、その環境で生きていく、生身の人間の潜在意識世界とのつながりが問われなければなりません。この子どもたちの「よみ」の世界が開かれていなければ、生きる力は先細りして、衰退していくばかりとなるでしょう。

〈授業の構え〉

第一の条件として、刻々と移り変わる時の流れ、季節の移り変わり、その最先端を子どもたちの感覚は捉えているのか、子どもたちの歳時の意識、歳時性を問うことがまず必要

になります。俳句のいのちはここにあるからです。

第二の条件として、人生にカット場面をもたらすもの、これが俳句であると考えています。時間と空間がパッと交差するところがカット場面です。ここに人間の意識はとまります。この時空の設定にテーマを取るとき、テーマを与えるとき、世界となります。

第三の条件は、この設定された世界は、イメージ世界の構成と考えられます。すなわち、夏を表すものと、夏を表すこととの取り合わせでなる世界だということです。そのため、子どもたちの潜在意識世界を刺激、触発することは（季語）を用意しなくてはなりません。五年生の子どもたちの感覚の最前線はどこに強く反応するかをみるためです。

なお、山に引き続き雲を取り上げるのは、この両者がイメージ世界において重なり合うと考えるからです。

3. 授業の展開

（1）歌を詠むということ

歌を詠む授業であることの確認のために、思いつくままに歌にどんなものがあるかあげてもらい、校歌も「千の風になつて」も「歌えバンバン」も短歌・和歌も俳句も歌であると整理しました。その上で、今日は俳句を詠

む授業であることを告げました。

つぎに、左記の三句を音読して、俳句が五・七・五の型を取ることをおさえました。

- ・古池や蛙とびこむ水の音(芭蕉)
- ・しずかさや岩にしみいる蝉の声(芭蕉)
- ・足元へいつ来たりしよ蝸牛(一茶)

(2) 夏を感じるもの、ことを挙げる

準備として夏真つ盛りを感じるものとことなどにどんなものがあるかと問いました。子どもたちが挙げたものとことを黒板に掲示していききました。これを次に列記します。授業では、子どもたちが挙げたものほかに、授業者が前もって予備・補足として考えておいたものと合わせて用いました。

〔夏を感じるもの〕

かき氷 スイカ 海 プール 扇風機 う
ちわ アイス かたつむり そうめん 冷
やし中華 蕎麦 カブト虫 クワガタ お
化け屋敷 クーラー 水着 蠅 蚊 朝顔
ひまわり あせも 入道雲 夏みかん 虹
滝 汗 (以下は補足) 浴衣 下駄 麦わ
ら帽子 風鈴 提灯 塔婆 よしず 昼顔
蛇 カミキリ虫 オニヤンマ カラスアゲ
ハ 蜘蛛

〔夏を感じること〕

花火 蝉の鳴き声 お祭り キャンプ 夏
休み 甲子園 夏風邪 台風 (以下は補
足) 夕涼み 蝉時雨 昼寝

※ 授業当日は非常に暑い日だった。子ども

たちは「歌を詠む」のイメージがつかめず
に、最初はとまどっていたが、歌とは「俳
句」であることが分かると少しリラククス
した様子だった。また、俳句を詠むための
準備として、夏真つ盛りのことばを集める
ところでは、殆どの子がイメージをつかん
で一生懸命考えることができた。

(クラス担任・亀山貴洋子)

(3) 取り合わせということ

先ほど子どもたちに示した芭蕉と一茶の句
に注目し、句を構成している二つのことばを
見つけてもらい、確認しました。その上で、
自分たちで取り出したものとことばの語群から
一つずつことばを取り出し、組み合わせれば
歌が詠めることを伝えました。
子どもたちが短冊に書いたものを黒板に掲
示していききました。

- ・かき氷 夏休みには かかせない
- ・甲子園 うちわをあおいで 見に行こう
- ・夏休み 暑い日には プールに行こう
- ・青空に 七色に輝く 虹の空

・夏みかん 夏風邪予防に もってこい

・青空に 風鈴の音が 鳴り響く

・夏休み 熱中症に 気をつける

・夏休み 怪談話を 聞かされる

・蝉の声が 蝉時雨になって 降り注ぐ

・夏祭り 必ず提灯 必要だ

※ 作り始めは、二つの言葉の取り合わせに
臆病になっていたが、いくつかの例が出さ
れ「ああ、こんな感じがいいのか」と最後
にはかなり積極的に作り始めた。掲示され
ている二つの言葉を選ぶと、それで歌の半
分以上が構成されてしまうため、仕上げて
いく段階が、子どもたちには難しかったよ
うに思う。(亀山)

(4) 「炎舞」速見御舟 を見て

二つのことばの取り合わせによって広がる
世界であること、また、瞬間を捉えているこ
とに気づくために、視覚にうったえる絵を用
意しました。

葛西 これはさつきからここでやってること
は、取り合わせをやってるんです。なんと
何を取り合わせてるの。

C 「炎」と「闇」。「炎」と「蛾」。

葛西 その炎と蛾を取り合わせて、さあ、み
んなはこれを見て、どんな風に思いまし
た。じゃあね、この絵に蛾が描いてなかつ

たら、みんなどう思います。炎だけだった
ら。

ゆう 炎と闇。

葛西 そう、炎と闇。そこへ蛾が加わること
によって……。

亀山 炎だけでも絵になる？

C なる？炎だけじゃ変？

亀山 炎だけじゃ変。だから、これを描いた
人は、ここに蛾を付けたんだよね。もねさ
ん、炎だけでも絵になる？

もね ならない。(小さな声で)

亀山 あみさん、どうですか？蛾だけでも絵
になる？

あみ なる。(小さな声で)

葛西 蛾だけでも絵になるんだけど、その絵
は。絵にはなるけどその絵を見た人は、蛾
が描いてあるって思うだけ。

小林 蛾だけでも絵になるけど、絵にならな
い。そこるところをもう少し。

C 見た人があんまり喜ばない。

小林 ああ、見た人があんまり喜ばない。

小林 さつきこれ見たときに、わーとか喜ん
でる人はいなかったけど、反応良かったよ
ね。なんて言ったか覚えてる？

「あー。焼かれるのに、焼かれるのに」と
かって言って。

中川 それから、「こえー」とかって

葛西 そう、怖い感じは炎だけでは出てこな

いよね。取り合わせてあるから不気味な感
じがする。

小林 それから先生の方には聞こえなかった
かもしれないけど、「どんど焼き」って思っ
た人もいた。蛾だけだったら「どんど焼
き」なんて思わないよね。炎だけでも思わ
ないよね。でも、目を細めたら全然別のも
の、「どんど焼き」じゃないのに「どんど
焼き」みたいに見えちゃった。

葛西 「はっ！」とした人いなかった？
「えっ、こえー」なんてのを別の言い方す
るなら、これを見て「はっ！」としたわけ
でしょ。違う？そういう感じなかった？最
初これを目にしたとき。

ただの炎だけ、蛾だけだったら、「はっ」
とはしないよね。でも、これが両方組み合
わせて、取り合わせて描いてあると、特別
な場面になって、それを見た人ははっと
するでしょ。それをさつきから君たちに
やってもらってたんだよ。

亀山 今さ、葛西先生が「はつとする」って
おしゃってたけど、それが「歌を詠む」っ
てことなんだよね。じゃあ今まで自分たち
が詠んだ歌はどうでしたか？

と、ここで先ほど自分たちが詠んだ句の中
に、ハツとした瞬間を切り取ったもの、絵に
なっているものを探すよう問いましたが、絵

になる、ということが子どもたちには難題で
したし、問いかけが粗雑でした。

※ 暑さと長時間のため、子どもたちの思考
が停止したように見える。しかし、「絵に
なるのは」「はつとする」などの投げかけ
に敏感に反応している子は少なくない。ど
の子も黒板の俳句を見つめ、求められてい
るものを見つけようとがんばっている様子
が見られる。(亀山)

(5) 富士の山を詠む

横山大観の春・夏・秋・冬、4種の富士を
見てから、富士の山を静としたら、夏のこと
ばのどれを動として取り合わせて詠むだろう
かと、期待のうちに始まりました。

- ・雲の上 少し顔出す 富士山だ
- ・日本一 雪をかぶった 富士の山
- ・うちわあおいで 見る富士は すぐしげだ
- ・雲の中 かくれていた 富士山だ
- ・扇風機 富士を見ながら あたってる
- ・夕すずみ 明るくみえる 富士山だ
- ・日本一高い山 青空の中で 見える富士
- ・夏の富士 青空よりも すぐきれい
- ・富士山 ひとりで かくれんぼ
- ・遠くから 見る富士山は ちっちゃいな
- ・富士山が 雲を見下ろす その瞬間

- ・夕焼けに そまった富士は 悲しそう
 - ・扇風機 富士山に行けば いららないよ
 - ・夏の富士 青空よりも すぐきれい
 - ・太陽があたってあつくても すぐしそうだ
- な富士山は

※ 富士の山の歌を詠む段階では、暑さによる子どもたちの疲れがピークだった。ただ、行き着く先が分からず、考えが空回りしている状態だった。時間を区切り、その中で全員が歌を詠まなければならぬという条件を設定することにより、「考えるよりまず行動」といったらよいのか「富士山」の俳句を詠み進めた。つたない俳句であっても、数をこなすうちに、一瞬をとらえるとはどういうことなのか、絵を詠むとはどういうことなのか分かってきたように思う。

(亀山)

クラス担任の亀山先生は行き着く先が分からない子どもたちだと見えています。富士を静とし、動として何を合わせるかという授業者の指示が、当初の計画通りにできていれば状況は変わっていたものと思われまます。

(6) 「雲の峰」を詠む

「よみ」の世界を開くための切り札、夏の季語である「雲の峰」を提示。合わせること

ばは自由に選ばせました。
亀山 「雲の峰」の絵を描くんだよ。言葉の絵を描くんですよ。

葛西 ・雲の峰 夕焼け空に 光ってる たつ君です。

中川 すばらしいねえ。

葛西 これ絵だねえ。絵を詠んでくれました。た。

小林 なんかみんな(詠むのが) 速くなったねえ。

葛西 最初の頃に比べるとすごいよ。

・雲の峰 そのままわたしを 覆いそうもねさんです。

亀山 今「雲の峰」が先に来てますけど、そうじゃなくてもいいよ。

中川 最後に「雲の峰」来てもいいね。でもすごいなあ。こんなにすばらしい。

ちよつと心すませてね。心の中に素直な気持ちで絵を描いてください。

(とまどってる子に対して) もう一つ言葉を選んでごらん。例えば「夕焼け空」とか。

(小林・子どもの間を回りながら、歌を詠むについてアドバイスする。)

葛西 ・雲の峰 遠くから見ると 小さいな

亀山 けいさん、本当は「雲の峰」は大きいの？ 小さいの？

けい 大きいよね。

中川 遠くから見てるからね。小さく見える。遠近だね。

小林 はい、スケールが大きくなってきましてよ。

葛西 ・雲の峰 もくもくと この大空をおおう たみさんです。

小林 なんか、亀山先生、絵を見るのがうまくなってきましたねえ。

(亀山・子どもの周りを回りながらアドバイスする。)

葛西 ・雲の峰 周りの山と競争 富士にはかなわない

さあ、みんなこれはやっぱり絵になってるんじゃないのかな。

・雲の峰 蝉の鳴き声 消えていく

小林 誰ですか、これ？ ちよつと手を挙げてみて。

(「たつさん」手を挙げる。)

中川 すばらしいねえ、たつちゃん。

小林 たつちゃんは最初から良かったんだけど、この一時間で進化してるよ。

葛西 はい、ゆう君です。

・夕焼けに 染まっている 雲の峰
「よ」をつけたくなるけれど。
・夕焼けに 染まっているよ 雲の峰
最初にね、歌を作るんじゃないかって詠むって言いました。それをね、歌を詠むことを、

みんなの中に生まれた絵を詠むことがごん
どん続いているねえ。

さきさんです。

・夕涼み 静かな空に 雲の峰

・雲の峰 蟬の鳴き声 消えていく で

しよ、それから今のさきさんの

・夕涼み 静かな空に 雲の峰

これ比べてどうですか、みんな？

「蟬の声が消えていく」

むこうは「静かな空に雲の峰」何と何を取
り合わせてるの？

片っぱは「蟬」、だけどそれも静かなんだ

けどね。こっちはこっちで静かな空、そ

こにそびえ立つ雲の峰

小林 なんか炎とか描いてある絵（炎舞）に

負けてない絵になってきた。

葛西 はい、もう読み切れない。はい、りか

さんですか。

・空を見上げると きれいに見える 雲の峰

・空を見上げると いろんな型に見える 雲

の峰

中川 確かに、ちぎれたりね。

葛西 はい、もねさん、

・雲の峰 青空後ろに 浮かんでる

小林 「青空」と取り合わせたんだね。

葛西 はい、よし君。

・雲の峰 まわりのものを おおってる

えー、みき君。

・雲の峰 近くで見ると 大きいな

やよいさん。

・青空で 青く染まるよ 雲の峰

亀山 できました。りかさんです。

・雲の峰 堂々と横切る オニヤンマ

「雲の峰」と何が取り合わせ？

C オニヤンマ

葛西 「雲の峰」は大きい。「オニヤンマ」は

ちっちゃい。

それから「オニヤンマ」は速い。ところが

「雲の峰」は動かない。

亀山 でもさあ、オニヤンマは動いているんだ

けど、止まっている絵が頭に浮かぶじやな

い。

中川 一瞬だね。すばらしい。

葛西 目の前を横切った、一瞬だ。

中川 では、一瞬賞を。差し上げましょう。

葛西 ・雲の峰 わたしと太陽 おおいそう

中川 いいねえ。大きくて。

・雲の峰 みとれてうっとり きれいだな

あきさんですね。

中川 美しいんだね。

葛西 はい、たつ君。

・雲の峰 虹の光も 届かない

葛西 これは何賞でしょうね。

中川 絵画賞

葛西 絵になってる。

・雲の峰 あのとつぺんまで 登ってみたい
ひろさん、そのくらい高いんだね。

亀山 それじゃあ、みきさんができたところ

で、終わりにしましょうか。

できそう？（ゆうさんに）

ゆう 絵じゃないもん。

亀山 いいから、やっちゃえ。絵じゃないと

思っても、絵かもしれないじゃん。

はい、できました。もう一人行きたいな。

中川 うん、すごくいい。いいじゃない。こ

れおいしい賞だよ。

葛西 ・雲の峰 夕焼け空と 消えていく

中川 一瞬賞だね。

葛西 消えていく。

小林 これは一瞬賞じゃないんだけど、いい

よ。ゆう君

葛西 ・夕立が 降るとかくれたい 雲の峰

・雲の峰 アイスのように 食べれそう

ゆう君だね。

中川 ソフトクリームのようにね。なるほど

ね。

亀山 でも、ゆうさんの「雲の峰」のイメー

ジは、すごく伝わるよね。

葛西 うん、調子が出てきたねえ。

けい君です。

・雲の峰 ぼつんと黒い カラスアゲハ

小林 おー、きれい。

葛西 さつきはトンボだったんだけど、今度

はカラスアゲハ。

亀山 けいさん。なに、これは。白い雲があつて、そこにすつとチョウチョが飛んできたと言うこと？黒い？

(けいさん：自分の絵を確かめるようにうなずきながら聞いている。)

葛西 けい君が、自分の中で描いた絵。言い方かえると夢の絵かもしれないね。その夢の絵を詠んだ。

小林 なんかそれ、一瞬賞でもあり、絵画賞でもあるよね。

中川 大きいのと、小さいのを捉えてるね。

※ 最終段階「雲の峰」では、二つの言葉を取り合わせることに、一瞬を捉えること、絵を詠むことがつかめた子が多く、スムーズに俳句を詠むことができた。特に最初の段階より二つの言葉の取り合わせが上手になり、それによって感性豊かな俳句が詠めたのではないかと考えている。(亀山)

3. 授業後の協議会から(抜粋して構成)

小林 子どものハツとするつば、大人にとつても同じなんだけれども、そのつば探しをずつと続けて来たんだけれども、「雲の峰」はやっぱりすごい。「富士山」も悪くない

けれども。それから炎で捉えた一瞬、あれは、子どもたちにとつては、かなり生理感覚にうったえていたなつて思う。「死んじゃうよ」「熱いよ」つて、「こわい」つて感じたのが、生理感覚に働きかけたことかなと思う。

亀山 でも、逆にね、あれは、生活の中にあるんですよ。だから、「こわい」つて反応したの。あれは、非日常じゃないから、子どもたちの潜在意識に働きかけたつていうか。でも、私は自分で思っていたよりも、成功じゃなかったなつて思う。葛西さんが、「富士山」が触発するのが弱かったつて言ったのは、あの絵と富士山が日常になかったと思うんですよ。ハツとする材料がもつと違うものだったら、富士山でもつといい構えができたと思うの。だけど、今日やっていていけばん思つたのは、子どもが二つのものを捉える構えが育つたなつて。たつ君なんかは、これから俳句をつくるよつて言つたら、「ああ、あの構えで行けばいいんだな」つて感じですね。いろいろ思うの。

小林 オニヤンマとかカラスアゲハの子は。

亀山 オニヤンマは、ずつとこっちに書いてあつたの。「雲の峰」どうどうと横切る」まではできていて、次をすごく悩んでいたの。

中川 オニヤンマが出たわけではないんだ。亀山 横切るものを考えていたの。この人は、きつと「どうどうと横切るは出ていたの」。横切らせるものは、何がいいか考えていたの。

小林 じゃあ、取り合わせてトランスフォーメーションができていたわけじゃないんだ。

亀山 じゃなくて、この子は「横切る」と「雲の峰」の取り合わせなの。「オニヤンマ」と「雲の峰」じゃないの。「雲の峰」という「静」があつて、「横切る」が「動」なんだと思う。「オニヤンマ」は材料なの。だから、この「オニヤンマ」の代わりをしたのが「カラスアゲハ」じゃないのかな。だから、あのときに、「オニヤンマ飛んでいっちゃうよね」つて。でも、「写真とか絵が見えるよね」つて言つたら、何人かの子が「うんうん」て言つてたでしょ。あつ、こういうふうには考えればいいのかつて思いついた子はいるのよ。私は、自分があの絵を見たとき衝撃だったから、もつとくると思つただけだ。

難波 (絵の) 大きさじゃない。あれ、小さかつたもの。黒板に貼つたやつは本当に小っこいし、それがあつて思うよ。単に絵の力の(問題)と言うことではないと思うよ。あの絵を持って回つたときに、子ども

たちが反応していたでしょ。(絵が小さくて) 分からないんだもの。

中川 (十五年前の女川での授業) では、上原先生が、とうとうと時間の3分の2は費やして「つくるんじゃない」「ゆめを語れ」というように言っていて、それで子どもたちの構えを育てて行ったんですね。でも、(今回) はそうじゃなくて、子どもたちが実際に取り合わせをしたり、句を詠んだりしながら、ポイントになるところをやっていたのがよかったかなと思います。まず、五七五なんだよと、そして歌と言っても普通の流行歌ではないんだよと。だけど、歌の仲間なんだよって。それから、言葉の取り合わせを大事にするということについて、上原先生が言っていたことがとてもよく分かりました。夏同士の言葉の取り合わせは失敗だと思うんですけど、この段階もやっぱり必要かなと思いました。あそこで悪戦苦闘することで、子どもたちは、ことばの難しさや、五七五の形でまとめる難しさ、それでも、綺麗な句を作れる子は作れるということを学んだんじゃないかと思えます。

「青空に 七色にきらめく 虹の空」とか、あんなに変な作業の最中にも、ちゃんと絵が描けている。子どもたちの作っ

た取り合わせから絵ができるということに入って、それから、あの絵(炎舞)に入ったので。でも、「蛾を消したらどうかな?」っていうのは、子どもたちには意味が分からなかったと思います。「炎だけで」とかね。ただ、「瞬間」というのは押さえることができたかなと思います。「あっちうち」の状態が瞬間であるということ、あの絵で物語ることができて、葛西さんが絵を見せるだけでも、子どもたちは納得しただろうと思いました。「瞬間を捉えるんだよ」と、一つ一つ段階を踏んでいったのがとてもよかったと思いました。

それから、写真のみで、歌を示さなかったのがよかった。富士の山の歌、雲の峰の歌など、一茶の句などを用意してあったんですけど、それを読んでしまうと、それに引きずられてしまう。

それから、「雲の峰」のイマジネーションを触発する強さを感じました。で、これは、「雲の峰」が「入道雲」や「積乱雲」だったらダメなんです。あんなに出てこないんです。「入道雲」を「雲の峰」に置き換えてるわけですよ。そのイメージ力に子どもたちはハッとさせられる。

そして、句ができていく段階が素晴らしい。さきちゃんなんて、「夏の富士 青空よりも すごくきれい」

から「夕涼み 静かな空に 雲の峰」に変わっている。たつ君にいたっては、すごくたくさん作ってくれて、

「夏みかん 夏風邪予防に もってこい」

から、「雲の峰 虹の光も とどかない」

「雲の峰 夕焼け空に 光ってる」

「雲の峰 せみの鳴き声 消えていく」と、それも早い。

長浜 さつき亀山さんがりかさんは、「雲の峰」と「オニヤンマ」で作ったのではないという指摘は重要ですよ。今、瞬間ということ、一つの視覚的な場面で読めるかということをやっているんだけれど、イメージ運動だから、その子が二つ何を取り合わせたんだらうということについては、しっかり資料を取っていかなくてはいいじゃないだろうと。

小林 亀山さんがきちんと言ってくれているんだけれども、「もの」と「こと」と「変化」の三つで(前回)とっていたんだけれど、そうやって区切ったものから選ぶのは子どもにとって難しいのかなと思う。今回、二つにした。そのへんを考えていかなくはないけない。「動きのあるもの」と「動きのないもの」それから「雄大なもの」「小さなもの」それから「遠いもの」「近いもの」常に二つのもの、「対」というのかな、その対を意識したときにトランス

フォーメーションを起こしやすいのかな。

中川 色もあったよね。「白」と「黒」。指導案にも、実は「静」と「動」で捉えた方がいいとあって、亀山さんがいいところを突いてくれていた。でも、子どもによって、どれを「動」としているのか違う。私たちは「雲の峰」というと「動」というふうにとらえているけど、「オニヤンマ」の場合「堂々と横切る」が「動」になっている。だから、何を「静」とし、何を「動」とするかは、子どもの奥底にあるイメージが、そうさせるのかな。

小林 「堂々と横切る」というのは、私たち、今回刺激していないわけじゃない。「富士山」と「雲の峰」は素材として出しているんだけど、「堂々と横切る」というのは、自分でジャンプしないと出せないと思うから、それが出せるというのはいすごいよね。亀山 瞬間を捉えるのが「詠む」ことなんだというの、よく(腑に)落ちた子はできている。

中川 上原先生がイマジネーションにはパターンがあると行ってたけど、さっき小林さんが言った「対」はそういうことなんだよね。そういうったパターンに気づかせるというのが根源的なイメージを触発することなのね。よく先生は「イメージはパターン化されてる」と言ってたでしょ。

難波 最初のところで動きが止まってしま

うのは、私たちは「もの」と「こと」のつもりでも、子どもにとっては、「もの」と「もの」なんだよね。だから「もの」と「もの」との関係において、感情とか出来事として押さえる。われわれは「こと」に動きがあると捉えるんだけど。あれを導入として使うなら、「こと」が「こと」らしく提示するというのか、どう言っているかわからないけれど、「夏休み」といっても、あのままでは「こと」ではない。単純な「もの」と「もの」だから、「夏休みなかき水 楽しいな」でいいわけよね。

中川 みきちゃんかな。「雲の峰 夕焼け空に 消えていく」としていたのを「夕焼け空」とに直したのよね。これは自分で直したのかしら。これは際立ってるんだけど、絵にことばをつけるというのか、子どもの中に「これでは絵にならない」という判断が働いたのよね。素晴らしいと思う。「なぜ、この一文字を換えたのか」ときいてみれば、「これで絵が描ける」と、きつと言ったんだと思う。

小林 「雲の峰」は子どもにとつて「静」にもなるし「動」にもなる。

中川 さっき、難波先生が言ったけれど、現象としての「こと」があるわけだけど、両方固定したものを留意して「さあ作れ」で

はだめよね。

秦 「雲の峰」の力というか、「入道雲」とはちがうとおっしゃったんですけれども、この力をはっきり言葉にしたいと思うのです。「富士山」「入道雲」では、それほど効果はなかった。近い存在だからこそ「富士山」が「もの」として感じてしまうのかもしれないし、「雲の峰」は比喩だと思うんですけれども、現実としての「もの」をみているんじゃないかと、イメージで世界を見ているという、その見方を凝縮したような言葉だから、子どもの感覚にすっと入っていくのかな。

小林 上原先生が子どもの歳時記を作れって言ってたけど、それは、語彙を増やすことを言いたかったのではなく、子どものイメージを活性化するような言葉があるんだって。それがあれば広がるんだと、「雲の峰」を出してきた。

難波 今日、あまり評価されなかったんだけど、「せみの声」が せみ時雨になって、ふりそぐぐなんていうのは、すごくいいと思うんだよね。「せみ時雨」ってなんなのかが子どもたちに落ちていく、その有様がよく表れているでしょう。この子には、「せみ時雨」ということばが動いたんだと思うね。

亀山 「降り注ぐ」とか「おおってる」とか、現象を言っているように思うんだけど、ああびつたりだなって。

難波 これは、「雲の峰」でなんで動いたのかっていう一つのヒントだと思っね。「覆う」という感覚があるんだなって。わたしたちには、あまりそういう感覚はないと思うんだけど、子どもたちにそういう感覚があるとするれば、それが大きなイメージを作っているんだなって。始めに出たから、いろんな子が使っているしね。そう考えると、子どもの持つてるイメージ語でもね、子どもから出させるときに、すでに子どもはフィルターにかけていると思うの。今日みたいな授業だったら、なんでもいいよって感じだからいいんだけど、なかなかそういう簡単にはでないでしょう。例えば、いろんな文章を読んだりして、この言葉は、私はいよいよって思うものをいっぱい出してみるとか、何かあるものから選ぶというのもあると思うのね。

亀山 子どもの中に根源的なイメージがある。

中川 子ども自身が気づいているかどうかかわからないけれど、今日は、そのことがよく分かったね。

亀山 やっぱ「おおってる」っていうのが一つ出たら、「あれがいい」ってなるものね。

あれは、まねしてるわけじゃないのよね。中川 それから、「とどかない」とか「のぼってる」とかは垂直、「横切る」は横なんだけど、垂直に行ってる子、覆ってる子っていうふうにいるんなパターンが出たでしょう。「消えていく」なんていうのも出たし。使ってみようかなっていうのはあっても、そっくりそのままねというわけではないのよ。

宮田 この授業に限らず、どの授業でも、子どもたちに「ハッ」とする瞬間があつて、なにか同じ事を聞いても、さっきまでとは違うと思えるような、それが全ての授業にあつてほしいというのが、上原先生の言葉にあるんだけど、意味の大きさというのかな、それを、かつての日本人は生活のいろいろなところで見せていた。「合わせる」とか「趣向を凝らす」みたいな、お茶会だつてそうだし、歌舞伎にも趣向を凝らすということ、全然違う話を同時進行させて、最後に辻褄を合わせるみたいなね。ありとあらゆる場で、なにか、自分も「ハッ」とさせてやるうじやないかって、その積み重ねが持つパワーっていったらいいのかな、子どもたちを見ていて感じていました。例えば、「雲の峰」で、スケールアップというのか、空間性（世界定め）な

んだけれども、取り合わせによって、詠んだ本人自身が、「こんなこと言っちゃった」「こんなこと言えちゃった」みたいな感覚があつたと思うんです。だから、そんな風に変わつていった。それで、まわりの子ども刺激を受けた。こういう授業が、小学校段階の教育で本気になつて行われたらなと思えました。

授業記録を整理している今、夏休みです。カーラジオをからは、「夏休み子ども電話相談室」が流れてきます。回答者の専門家も司会のアナウンサーも、「くを知っていますか」「分かりましたか」と子どもたちに問いかけます。「ハッ」とした体感を捉える教えない授業はその対極にあると言えます。

イマジネーションの発動は覆う感覚、包み込む働きです。新しい景色が見え、それまでとは異なる世界が広がるのはその威力によるのだと考えられます。

* 授業者、発言者は実名で、子どもたちは仮名をひらがなで示しました。

* 秦 恭子の左記の論文を参照されたい。

『心意伝承論の国語教育への展開とその可能性』——「児童の言語生態研究会」の俳句創作指導を事例として——

初等教育カリキュラム研究3号・2015

(東京・元聖徳学園小学校教諭)